

# 活 動 報 告

## 2003年度 神奈川大学 人文学研究所／国際シンポジウム シンポジウム「アジアのポップカルチャーと日本」

### 趣意書

神奈川大学人文学研究所は1980年代以降、急激に変化する東アジア地域に対する理解を深めるべく、2001年2月には「21世紀、アジアの座標軸を求めて—東アジアの相互認識」を、そして、2002年10月には、「戦後補償と在日外国人の人権問題」をテーマに取り上げたシンポジウムをそれぞれ開催した。

アジア諸国をめぐる政治情勢の変化は中国の改革開放政策に始まり、台湾での陳水扁総統の当選、韓国での金大中・盧武鉉政府の誕生、東南アジア諸国連合(ASEAN)の結束の強化など、様々な方面で確認することができる。政治情勢の変化以上に大きな変化は言うまでもなく、経済や産業部門で現れた。なかでも、中国の主要都市(北京、上海、広州など)は驚異的な経済成長を遂げ、今日では世界の「工場」としてもてはやされている。もちろん、アジア地域における通貨危機やバブル崩壊などで、アジア諸国の脆弱な経済体質が明らかになったことも事実であろう。

このような大きな変化は政治や経済の方面だけに限られたものではない。とくに、アジア諸国で活発になった人とモノの「移動」は、新たなポップカルチャーの形成を促した。都市を媒介とする大衆文化の拡散現象である。東京、上海、香港、ソウル、マニラの街角では、携帯を片手に、コンビニに通う若者の新たなポップカルチャーが共有されつつある。このようにアジア地域は、国際社会のなかで独自の文化圏を形成しつつある。

そこで、2003年度、神奈川大学人文学研究所は「アジアのポップカルチャーと日本」というテーマを取り上げ、アジア諸国のポップカルチャーを軸にアジア諸国と日本との関係について議論をすることにしたい。また、それぞれの国のポップカルチャーが形成、発展するなかで日本のポップカルチャーはどのような影響を与えているのだろうか、そしてアジア諸国のポップカルチャーはいま、どのように進化しているのだろうか。学内・外から多くの方のご意見を賜りたい。

### プログラム

会場：神奈川大学／セレストホール

日時：2003年11月2日

挨拶：伊坂青司(神奈川大学)

司会：寺沢正晴(神奈川大学)

### 報告者

王向華(香港大学・日本研究センター)

程郁(上海師範大学・助教授)

オスカー・カンポマーネス(Oscar Campomanes—ラサール大学出版会『American Studies Asia』  
編集者)

陳昌洙(韓国／世宗研究所・日本研究センター)

### コメンテータ

市川孝一(文教大学)

朴順愛(韓国／湖南大学)

## 報告記録

香港大学の王向華氏の報告は「香港における日本の大衆文化の文化的影響」という題のもので、日本のポップミュージックとヤオハンを事例に日本文化がどのように香港に定着したのかを取り上げたものであった。王氏の分析によれば、日本の大衆文化のどの部分が選択・輸入・消費されるのかは、現地の地域社会、産業構造とも密接な関連をもつものである。例えば、1970年代、80年代の香港に日本の歌謡曲が流行したのは、その輸入が商業的な利益に繋がるものであったからに他ならない。経済分野においてヤオハンが香港に根を下ろしたと評価できるのであれば、その成功の最大の要因は土着化に成功したことによる。

上海師範大学の程郁氏の報告は、上海に在住する日本人の子供の1980年代以降の中国観の変化を紹介するものであった。とくに、程氏は上海日本人学校の児童のアンケート調査をもとに、①1987年～1989年、②1990年～1995年、③1996年～2003年の上海在住日本人学生の中国観の変化を詳細に追跡している。今まではなかなか活用できなかったアンケートという社会調査の手法を取り入れた点は多くの反響を呼んだ。討論の時間でも、中国、韓国、日本が共同でアンケート調査を行うことは可能かどうか多くの質問が寄せられた。程氏は改革開放が進んでいる上海では、社会学の各種統計やアンケート調査を実施することは可能であり、日本、韓国、中国の大学が共同のアンケート調査を実施することの意義についても言及した。

フィリピンからのオスカー・カンボマーネス氏の報告は、フィリピンのテレビ番組（GMAチャンネル7）で放映された日本の大衆アニメ番組「スラム・ダンク (SLAM DUNK)」を題材として、フィリピンにおけるアメリカと日本の大衆文化の表現形態を分析したものであった。氏は、従来のフィリピンのメディアや大衆市場のなかで長く根をおろし、独占的に消費されてきたアメリカの大衆文化に強力なライバルとして登場した日本の大衆文化がひき起こした影響を丁寧に説明した。氏は「スラム・ダンク」という日本的なものがフィリピンというアメリカナイズされた文化と異種混交される過程について今後も注目すべきであると指摘した。

韓国の陳昌洙氏の報告テーマは「韓国における日本大衆文化の開放」であった。氏は、日本文化の開放に対する韓国国内の賛否論争を紹介した後、文化開放の効果、日本文化開放の政治的な意味を順次、論じた。日本大衆文化の開放問題は日韓の貿易不均衡、過去の歴史の清算問題などと共に日韓関係の主要な政治争点であった。氏は日韓が自国の被害意識のみを強調することの問題点を指摘し、とくに歴史教科書問題については両国の政策的な対応が早急に必要であることを力説した。

市川孝一氏のコメントは戦後日本の外来大衆文化の受容に関するものであった。氏によれば、戦後の日本はアメリカの大衆文化を急速に受け入れ、その変化は戦前の「鬼畜米英」からアメリカ崇拜とまで称されるほど急激なものであった。ところが、ここで注目すべき点は、日本がもっている外来文化を「日本的なもの」にたくみに作り変える能力である。さらに、氏は日本人のアジア大衆文化の消費が徐々に拡大して行く現象を近年、日本でも放映された韓国の「冬のソナタ」という番組を取り上げて説明した。

朴順愛氏は最近の韓国の若者の間に急速に進んでいる日本の大衆文化の受容はアニメーションと漫画などを媒介するものであることを指摘した。日韓両国間の歴史問題は両国が建設的に未来構築していくためには打破しなければならない。しかし、歴史問題が政治問題として利用されるような現状では、政治的な解決を急ぐよりは両国の若者の交流の活性化に期待をかけるべきであると言及した。

(文責 孫安石)

## 講演会要旨

開催日：2003年9月24日（水）

会場：17号館216号室

講演者：永見文雄教授（中央大学文学部）

演題：自然について－ジャン＝ジャック・ルソーを中心に－

ヨーロッパ自然観を探る上で、「ルソー」は外せないテーマの一つであろう。永見教授は、「自然に帰れ」と言った思想家になっている、この誤った解釈を解き明かすことから話し始めた。文化から自然状態への回帰が提唱されたのではなく、文化から別の文化への道が示唆されたのだ。自然にはもはや帰れないことは、承知されていた。

ヨーロッパ思想史を廻り、ギリシャ哲学における「自然」が語られる。次いで日本人の自然観について。

「自然」という語の語義が17世紀の辞典を手始めに様々な辞典で確認される。自然界の自然、そして本性。

18世紀フランス啓蒙のフィロゾーフたちの、神あるいは自然をめぐっての相克が説かれる。最後は実際に作家のテキスト抜粋を皆で読みながら、ルソーが「自然」に託した思想が究明された。

（佐藤夏生）

## 2003年度 人文学研究所活動報告

### 共同研究グループ

#### 文化のかたち

1. 「文化のかたち」研究会

2. 研究会の開催

(1) 第1回

開催日 2003年6月18日(水)

会場 神奈川大学17号館3階談和室

テーマ 「今年度の活動方針について」

出席者 秋山, 堤, 大須賀, 米重, 佐藤, 岩本, 羽佐田, 水野

(2) 第2回

開催日 2004年2月20日(金) 午後1時～

会場 神奈川大学17号館2階人文研究所資料室

出席者 秋山, 小馬, 中本, 水野, 堤, 大須賀, 佐藤

3. 活動内容

来年度の叢書刊行を目指して、その原稿を準備するステップとして、11月までに各自の専門性を生かす方向で執筆計画書を各自提出することとし、各自が提出した原稿を検討して、座談会を開いてディスカッションし、作品をより良いものにしていく共同研究の場としてゆくことで一致した。

(水野光晴)

### 自然観研究グループ

1. グループ名 自然観研究グループ

2. 講演会の開催

開催日 2003年9月24日(水)

会場 神奈川大学17号館216室

発表者 永見文雄教授(中央大学文学部)

演題 「自然について—ジャン=ジャック・ルソーを中心に—」

3. 活動内容

研究テーマを「自然観の変遷と展望」ときめて、次のような三分野において順次、講演会を行っている。1) 思想における自然観 2) 文学における自然観 3) 環境学における自然観

早いもので、2000年度から始めたのが、次年度で5年めとなり、2005年刊行予定の叢書のための執筆が日程に上って来た。

(佐藤夏生)

## ポストコロナル・スタディーズの冒険

本研究グループは、2000～01年度神奈川大学共同研究奨励金「ポスト植民地主義思潮の研究」の成果として、神奈川大学評論叢書第10巻『ポストコロナルと非西欧世界』御茶の水書房（2002年）を刊行した。今後の研究活動（第Ⅱ期）の開始時期とその展開については、現在模索中である。

（永野善子）

## スポーツの系譜

### 1. 講演会・研究会の開催

#### (1) 第1回講演会

2003年6月9日（月）、17-215室、平井信行（気象予報士）、「野球と気象」

#### (2) 第1回研究会

2003年11月14日（金）、体育共同研究室

### 2. 活動内容

グループ設立2年目の今年、八久保厚志氏のご尽力で初めての講演会を開いた。テレビで有名な気象予報士の平井氏はかつての高校球児であり、特にプロ野球のチームの試合と当日の気象との関係などを中心に講演していただいた。会場には将来の気象予報士の夢を持つ学生も集まりさまざまな議論に花が咲いた。

初めての研究会は周知不徹底で参加者が少なかったが、文化とスポーツあるいはソフトウェアとしてのスポーツという視点をとりつつ、3、4年後をめどにまとめていくという計画で一致した。

（三星宗雄）

## 現代精神史におけるスペイン内戦の意義

昨年度に引き続き、今後の展望について、構成員で数回狭義した結果、当共同研究の意義は確認されつつも、本グループは発展的に解散することとした。グループ発足者の逝去、重要メンバーの定年退職などを受け、共同研究を支えるに足る十分な数の構成員の獲得が不可能なためである。

（大林文彦）

## 色彩語の社会言語学的研究

代表者 彭国躍

メンバー 三星宗雄、彭国躍、堤正典、星野澄子、尹亭仁、新木秀和、加藤宏紀、小馬徹

活動内容

11月5日に一回目の会合を開いた。研究発表「色彩学の中の色名」（三星）を行った後、今後の活動計画について議論を交わした。次回の会合は、日本、中国、ロシア、韓国、スペインなどの言語社会における色彩語研究の現状と問題点などについて話し合う予定である。

## 日中関係史

今年度は、メンバーが集まって打合せ会あるいは研究会を開く機会を持ってないまま、講演会を数回開くに留まったのは遺憾である。来年度はその点を反省して、大小さまざまな研究会活動を基本に据えたい。

今年度開いた講演会（開けなかった分を含む）は以下の通りである。

03年5月8日 横堀克己氏（元朝日新聞論説委員）「北京からの報告」— SARSの影響で中止。

6月5日 曹振威氏（中国復旦大学教授）「上海から見た戦後日中関係史」。

7月3日 横浜の国際交流を考える

1) 浦川久代氏（横浜市国際交流協会職員）「横浜市の国際交流活動について」

2) 早川秀樹氏（多文化まちづくり工房代表）「地域と密着する国際交流活動」

10月20日 片寄浩紀氏（国際貿易促進協会専務理事）「今後の日中経済関係」

なお、本学の共同研究奨励金を得た「戦前中国における日本租界の研究」の成果は、『人文研究』No.149に掲載することができた。また、メンバー3人と曹振威氏による座談会記録「歴史問題と日中関係の現在」は、『神奈川大学評論』46に発表した。

(大里浩秋)

## 西洋文化の受容—思想と言語

テーマ 近代日本における西洋文化受容の総合研究

代表者 高野繁男

活動内容

前2年間、本学共同研究奨励金を受けたが、2003年度は、その総括として本研究所叢書にまとめるための、個々の論文の読み合わせを中心に月例会をもった。その成果として、叢書20号『『明六雑誌』とその周辺—思想と言語—』を出版する運びとなった。叢書の執筆者、例会における外部講師による講演会は以下のようである。

執筆者 浅山、伊坂、岡島、鈴木、高野、吉井の6名

講演会 6月25日

目白学園短期大学教授 陳 力衛氏「和製漢語の展開」

(高野繁男)

## 物語研究

本年度の活動は、構成員各自の研究には進展があったものの、責任者の日高がサバティカル中であったこともあり、グループとしての活動は、残念ながら低調だった。

本グループの研究は、神話、伝承、前近代の物語、近代小説まで、口承書承を問わず、物語性をもつ言語表現の形態全般を対象として、ストーリーやプロットなどの（構造的）論理を考究すると共に、時間的・偶然的な要因である歴史性についても幅広い視点から考察を深めることを目的としている。

ただ、グループの発足以来の悩みは、構成メンバー6名（常勤教員5名、非常勤教員1名）と少ないうえ役職者も多く、研究活動の日程調整がきわめて難しいことであった。

そうした研究条件の中で活動を継続する方策として、構成員各自がある程度纏まった文章を他の全メンバーに随時送付して相互批判を乞うという融通性のあるシステムを採用し、これを「物語研究会通信」と名付けてきた。他のメンバーが来信に自由に応答しながら、次の発信を用意するのである。これを活用しつつ、次年度はメンバーを増やして活動を活性化したい。

(日高昭二)

## 各国地方史の比較史的研究—新編中国地方志（誌）叢書を中心として』

第一回 研究会での報告者及び内容について

日 時：2003年7月25日 場所：17号館 人文学研究所資料室

出席者：10名

報告者：小林一美

1. 共同研究グループ発足にあたっての趣旨説明。

研究テーマ：「世界史を現存する国家、民族、文明というレベルで考察するのではなく、地方史という狭い地域的観念から見直すことを目的とする」。

活動計画：本学人文学研究所で購入した大量な中華人民共和国地方史叢書を分析し、世界各地域の研究者とともに現存の国家、民族、文明に収斂しない地域・地方文化の多様性を再発見することを目的とする

定期的に研究会を開き、中国研究者と他分野研究者の二名の発表を行うこととする。

2. 「『中華人民共和国地方志（誌）叢書』を主たる資料、史料として書いた私の4つの論考について」

- ①「中華世界の構造と難民、移民、華僑」
- ②「中国社会主義政権の出発—鎮圧反革命運動の地平—」
- ③「1930年代初期、中国共産党の内部粛清の実態」
- ④「中華帝国を夢想する叛逆者たち」

報告者：佐々木恵子

「中国地方志叢書について」

地方志とはなにか、地方志の定義。

史料としての地方志、その利点と問題点。

新編中国地方志叢書の利用価値について。

以上の報告に対する質疑応答。

第二回 研究会での報告者及び内容について

日時：2003年12月5日 場所：17号館 人文学研究所資料室

出席者：6名

報告者：小林一美

「上海の復旦大学を訪れて」

復旦大学に日本語の蔵書約5000冊（雑誌を含む）を寄贈したため、贈呈式に出席した際の様子と中国の大学における日本語書籍の現状と日本研究の問題点についての考察。

報告者：孫 安石

「最近の上海市関連の地方誌出版について」

1930年代から現在に至るまでの上海における地方誌出版の歴史的流れとその内容についての報告。

1. 上海地方誌の出版と中華民国。
2. 1930年代の上海研究。「上海市通志館」の重要性について。
3. 1980年代以降の地方史研究。「中国地方誌研究会準備会」会議の開催等について。
4. 上海の各種区誌と専門別通誌の発行について。『虹口区志』と『黄浦区誌』にみられる租界及び日本人に関する記述の重要性について。コミュニティー活動、環境衛生に於ける中国の現状と日本との比較。『上海審判誌』にみられる裁判事例の提示。

以上の報告に対する質疑応答。

(代表 小林一美、報告書作成 佐々木恵子)



### 東アジア比較文化研究会

人文学研究所の共同研究グループ「東アジア比較文化研究会」は日本、中国、朝鮮等の言語、文学、歴史、民俗などを比較文化的視点から研究することを目標に、これまで東アジア（日本・中国・朝鮮）の文化を比較し、相互の影響関係やそれぞれの独自性を検討する作業を行ってきた（1995年、1996年には科研「中国江南の都市文化研究」という研究実績がある）。

昨年からは学内共同研究奨励金「環東シナ海伝承文化の総合的研究プロジェクト——海洋ネットワークの視点からの接近」（共同研究奨励金グループ活動報告を参照）に採択され、活動を展開しているが、多くのメンバーが神奈川大学の「21世紀COEプログラム——学際・複合・新領域（人類文化研究のための非文字資料の体系化）」に参加することで、本共同研究の活動は残念ながら低調であった。しかし、21世紀COEプロジェクトに本共同研究の多くのメンバーが参加していることは、東アジア比較文化研究というテーマがもつ意味が再度確認されてことを意味する。神奈川大学のCOEについては[http://www.himoji.jp/img/t\\_headSetsumei.jpg](http://www.himoji.jp/img/t_headSetsumei.jpg)を参照。

（孫安石）

## 共同研究奨励金グループ活動報告 (2002 - 2003 年度)

### 環東シナ海伝承文化の総合的研究

#### I 環東シナ海伝承文化の総合的研究

#### II 共同研究メンバー

大里浩秋, 河野通明, 鈴木陽一, 佐野賢治, 孫安石, 中島三千男, 廣田律子, 福田アジオ, 彭国躍, 山口建治

#### III 研究目的

人文学研究所の共同研究グループ「東アジア比較文化研究会」は、これまで日本・中国・朝鮮の文化を比較し、相互の影響関係やそれぞれの独自性を検討する作業を行ってきた。本研究は、この共同研究を基盤にしつつ、東シナ海をとりかこむ日本・中国・朝鮮・臺灣の環東シナ海の伝承文化を総合的に研究することを目的とする。

東シナ海沿海の各地域はそれぞれ固有の伝統文化を育んできたが、同時に共通する側面もまた少なくない。古来、様々な人々がこの海域を縦横に行き交い、交流・接触が行われてきたからである。今回の共同研究では、この海域沿岸部の人々の暮らしと伝承文化を調査し、その交流・接触の様相・形跡を洗い出すことに努める。共同研究メンバーの専門分野を考慮し、今回の中心課題は1, 生業とその用具, 2, 祭りと芸能, 3, 神話と民話の3領域とする。

#### IV 今年度の活動内容

今年度はアジア各地で発生した新型肺炎 (SARS) の影響で殆どの研究調査を実施することができなかった。そのために共同研究奨励金の予算は、環東シナ海の諸地域 (天津, 青島, 上海など) で発行された新聞資料の収集と購入に当てられた。歴史学や民俗学において現地での生の資料に接することが大事であることは言うまでもないが、今回購入した資料の多くは20世紀前半に発行された新聞資料である点、多くの分野で活用されることを期待したい。共同研究メンバー個人による調査としては山口・孫の調査が実施された。

### ■ 山口建治

#### (1) 2002年9月14日～15日 第5回全国獅子舞シンポジウム in 札幌に参加

今回のシンポジウムには富山県砺波市鷹栖の獅子舞保存会が大挙して参加、その重厚勇壮な舞が披露された。翌日、札幌市内の丘珠神社秋季例祭で、獅子舞を見学。明治の中頃砺波地方の獅子舞がこの地に伝えられたものという。昨日のシンポジウムで披露された鷹栖の獅子舞と比較することができた。いずれも多数立ちで、木製の獅子頭は10キロ近くの重量があり、勇壮な獅子舞であった。

#### (2) 2003年1月4日～7日 丹後半島調査

若狭湾をかこむ丹後半島の与謝郡伊根町には浦島伝説発祥地の宇良 (浦島) 神社と徐福渡来伝承地である新井崎神社があり、一度訪ねてみたいと思っていた所。同町には海洋民特有の家屋がある「舟屋の里」としても有名な伊根漁港がある。新井崎から伊根漁港まで海沿いに約一時間歩き、海を生活の根拠にした人々の間でこそ、浦島や徐福の伝承がおこりえたのだと実感した。帰路、大江町にある「日本の鬼の交流博物館」見学した。鬼にかかわる資料がかなりよく纏められていた。

## ■ 孫安石

### (1) 2003年11月28日～30日 上海市／徐家匯藏書樓の資料調査

今回の調査の目的は昨年度の新型コロナの影響でしばらくの間連絡がとれずにいた中国の研究者と連絡を再開することと、上海市図書館の分館にあたる徐家匯藏書樓の資料状況を確認することであった。今回の上海訪問では上海社会科学院と復旦大学、そして、華東師範大学の諸研究者と今後の共同研究活動について打合せをすることができた。上海市図書館分館の徐家匯藏書樓は、亜州文会図書館(The Royal Asiatic Society North China Branch) 徐家匯天主教藏書樓(Library Bibliotheca Major Zi—Ka—Wei)、共同租界の工部局図書館(The Municipal Library)の旧図書を所蔵するほか、19世紀末—20世紀初頭に上海で発行された多くの英字新聞の原紙を保管している。最近と同蔵書樓が所蔵する日本語関連の図書目録(上海図書館編『上海図書館館蔵旧版日本文献総目』上海科学技術文献出版社、2001年)が刊行され、日本でも注目を浴びている。今後、同蔵書樓が所蔵する資料を駆使した研究成果が発表できるように準備を急ぎたい。

(孫安石)

## 東アジアにおける近代探偵小説の誕生

### 1. 構成員

鈴木陽一・岩本典子・大里浩秋・大林弘道・加藤宏紀・孫安石・寺沢正晴・富井正憲・日高昭二・山口ヨシ子・横倉節夫・吉井蒼夫生

### 2. 目的

19世紀後半に、欧米で生まれた探偵小説はほどなくアジアに輸入され、短期間のうちに翻訳、翻案され急速に読者層を拡大していった。それは、探偵小説の成立とアジアへの移入が、アジアにおける近代化、欧米化の時期と重なっていたためであり、最も新しい娯楽文化としての探偵小説が受け入れられる土壌がアジアの都市部で整っていったからに他ならない。やがて、翻訳、翻案から、模倣、創作へと移っていくにはそれほどの時間を要せず、こと探偵小説に関する限り、1920年代には、欧米とほとんどタイムラグがなくなっていた。

こうした状況から、我々の研究グループでは、探偵小説のアジアにおける成立の歴史を、社会の近代化、欧米化の指標ととらえ、その歴史を通じて、アジアにおける近代化の意味を問おうとするものである。

### 3. 2003年度の研究経過

6月に研究会を開催し、今後の研究の進め方についておおよその方向を確認しあった。その後、8月に韓国の都市の調査、上海、蘇州における資料調査と聴き取りを行った。特に、蘇州では、元本学特任教授嚴明氏(現蘇州大学教授)、上海師範大学潘建国教授の協力の下、1920年代から50年代に活躍した探偵小説作家程小青氏の旧居を訪問し、子孫の方から貴重な証言を聴くことができた。更に、年度内に横浜・東京での資料調査を行う予定である。

### 4. 資料の収集

現在、日本と中国で出版されている戦前の探偵小説の作品集、或いはこれに関する論文、評論を収集している。また、可能なものについては、当時の雑誌のコピーなども収集し始めており、これらを人文学研究所の書庫に集め、広く利用に供している。

(2004年1月)

## 所員の自著紹介

### 『中国人日本留学史研究の現段階』

大里浩秋，孫安石編著

御茶の水書房 2002年5月31日（447頁）

ほぼ100年前、中国からどっと留学生が日本に押しかけてきて、日本語学校や下宿屋が盛況を極め、大学もその受け入れに大わらわとなった時期があった。何やら今に通じる現象だったといえなくもないが、その頃は祖国の危機を救う妙策として留学がとらえられており、没落寸前の清朝は学費を援助する代りに監督処を設けてわき目もふらずに勉学に励むよう管理を厳しくした。それに比べてどうか、留学生は日本各地の大学、専門学校や官庁内の講習所に通って、専門知識を身につけて祖国に帰って行った。受け入れた学校も熱心に教育した様子がうかがえる。といっても、学業を放棄して清朝打倒の革命運動に参加する学生も一部にはいた。

それ以来、日本が日中戦争をおこしそれに敗北する時期に至っても中国からの留学が続くが、その時々留学生の動きおよび日中双方の政府や民間の彼らへの対応を、さまざまな角度から明らかにすべく書いた9篇の論文と2組の資料の目録で構成したのが、この本である。科研費を得た共同研究の成果報告として、人文学会のミレニアム記念出版助成を得て公刊されたものだが、現在この続編を書きたくて調査研究を行っているところである。



### 『基本語英会話 Be, Have, Go, Go!』

水野光晴著

増進会出版社 2003年12月（287頁）

英語圏の人々が日常生活で最も頻繁に使用する

英語の基本語彙のうち、英文構成の上でとりわけ重要なパラミター（前置詞や副詞などの仲介語）と、基本動詞の計50語を中心にした短文の日英対比例文を解説したものである。とくに本書は、日本人の英語発信に、21世紀の国際共通語としてかねてから提唱しているグローバル・イングリッシュ1000語の例文の内在化が不可欠であるという筆者の信念にもとづいている。本書の構成は、迅速な英文の生成・理解を促進するアプローチとして筆者がここ十年来提唱しているパイリンガル・センテンス・アナリシスの手法にもとづいている。

合理的に英文の内在化を図る場合、毎日一定量の日英対比例文をイメージトレーニングによって反復練習することが不可欠である。また、本書はマジックナンバー（最良の記憶の定着率）をペースメーカーとして1日分の学習量を設定してある。本書の例文の意味を、イメージトレーニングして、英文の反復練習を1日も怠らなければ、英会話は間違いなく自由自在になる。つまり、本書のアプローチは、いつでも、どこでも、誰もが自己ペースでストレスを覚えることなく参加できる、環境にやさしい民主的な学習法である。

幸運にも、発売一ヵ月後の本書の週間売上高は、八重洲のブックセンターで全ジャンルベスト7位、アマゾン・コム読本、解釈、会話部門でもベスト9位、紀伊國屋書店の会話部門でベスト7位に入るなど、なかなか好評である。



### 『中国のしくみが手短かにわかる講座』

田畑光永著

ナツメ社 2003年3月12日（262頁）

中国の歴史、現状、課題などを一般向けにわか

りやすく解説したもの、1項目を2頁の読み切りにし、図版等を多用している。



## 『フィリピン銀行史研究 — 植民地体制と金融』

永野喜子著  
御茶の水書房 2003年12月15日 (xv + 356 + xxxi 頁)

本書は、筆者の1990年代におけるフィリピン銀行史研究の集大成である。筆者が本書をまとめるうえで最も腐心した点は、これまでフィリピン史研究のなかで時折取り上げられてきた、第一次世界大戦直後のフィリピン国立銀行疑獄の実態に関する包括的解明である。従来の研究では、第一次世界大戦直後にフィリピン国立銀行は深刻な経営難に陥ったが、その原因はもっぱら、当時同行の経営権を掌握していたフィリピン人幹部が近代的銀行経営の知識をもたず、旧来の政治・経済界の人的関係に依存しながら融資事業を展開したことにあるとされてきた。

しかし、銀行史研究を進めるなかで、著者は、第一次世界大戦直後のフィリピン国立銀行疑獄の全貌を明らかにするためには、従来の経済史研究の手法ではどうしても解けない問題があることに気づき始めた。そのひとつは、植民地の通貨制度を維持するうえで中央銀行がない時代にフィリピン国立銀行が果たした役割について突っ込んだ議論が必要なこと、もうひとつは、フィリピン国立銀行疑獄と通貨制度の同様との関連を明らかにするうえでは、フィリピン政府の政治・行政機構はもちろん、アメリカ本国の植民地管轄機構である米国陸軍省島嶼地域担当局 (BIA) のフィリピン通貨制度維持に対して果たしてきた役割について深い洞察を得る必要があることであった。

本書は、1998～99年の神奈川大学長期在外研究員として、アメリカとフィリピンで実施した1年間の資料調査にもとづく学術研究の成果である。

## 文献解題

『フィリピン歴史研究関係マイクロフィルム3点』

- ① History of the Philippine Insurrection against the United States, 1899-1903, and Documents relating to the War Department Project for Publishing the History. US National Archives, 9 reels.
- ② Philippine Liberty News March 20, 1946-Dec. 20, 1946 Manila, 2 reels.
- ③ Voz De Manila, March 23-Dec, 7, 1945; July 4, 1946-Dec. 14, 1948, 2 reels.

本マイクロフィルム3点は、19世紀末から20世紀前半を対象としたフィリピン史研究にとって重要な史料である。①は、19世紀から20世紀への世紀転換期においてフィリピンで世紀した独立革命に関する史料である。この独立革命は、1896年に対スペイン独立戦争として勃発したものであるが、米西戦争とのからみで、1899年からは、フィリピン・アメリカ戦争として展開された。①は、フィリピン・アメリカ戦争期におけるフィリピン革命軍の反乱に関するものである。②と③は、1942～45年の日本占領期末期と1946年7月アメリカから独立を経た時期にマニラで発行された新聞のマイクロフィルムである。こうしたマイクロフィルムを活用することによって、既存の研究では得られない知見を獲得することができるかもしれない。

(文責：永野善子)



## 『菊池寛を読む』

日高昭二著  
岩波書店 2003年3月25日 (233頁)

本書は、2001年10月に行われた岩波市民セミナーにおける講義をもとに、〈岩波セミナーブックス88〉として刊行されたものである。芥川龍之介と並んで「新思潮」の代表的な作家のひとりである菊池寛は、その戯曲と小説に示された卓抜

な「技巧と主題」が取り沙汰されてきた。しかし、それは、大雑把な同時代批評がつくりだした表層的なイメージに過ぎなかった。たとえば、出世作「藤十郎の恋」には、元禄期の歌舞伎についての「芸談」を大正期のいわゆる「新歌舞伎」運動のそれと重ねあわせるとき、戯曲解釈と演出の存在による近代劇への橋渡しの実態がよく浮かび上がってくる。また有名な「父帰る」には、家父長制度の近代的な再編という主題が明瞭にあり、「恩讐の彼方に」では、明治六年の「仇討禁止令」に始まる近代法制度への移行による「道徳」と「法」の軋轢が見て取れる。さらにベストセラー小説「真珠夫人」には、高利貸を転じて約束手形や債権譲渡などの信用経済学の勃興に裏付けられた「愛と信」のパワーゲームを読み取ることが可能となる。言うまでもなく、歴史と文化の記憶のなかに、文学テキストの言語的な表象を「読む」試みに他ならない。

なお、本書の切り口の一つである〈仇討もの〉というジャンルの近代的編制については、日高の編著『近代つくりかえ忠臣蔵』（2002・12、岩波書店）が、これとほぼ同時に刊行されていることを言い添えておきたい。

人文学研究所共同研究グループ一覽

2003年5月30日現在

No.	名 称	研 究 テ ー マ	活 動 計 画	代 表 者	メ ン バ ー	人 数	叢 書
1	現代精神史におけるスペイン内戦の意義	スペイン内戦への作家たちのアンガージュマン	1.年に数回、メンバーによる研究会を持つ。 2.資料収集 3.新規メンバーを募る。	大 林	(学外)中本・中村(浩)・岩崎・(名)大林	4	検討中
2	日中関係史	1.明治期から現在までの日中関係の諸問題	1.メンバーあるいは外からの講師を招いての講演会、研究会(年4回程度) 2.今年度から科研費を得て『中国人日本留史』に関する調査研究を開始する。 3.中国における日本租界史の研究を継続する。本学研究助成の成果報告(『人文研究』特集号)の合評、および資料収集の継続。	大 里	小林(一)・高野・中島(三)・松本(宏)・日高・山口(建)・鈴木(陽)・望月・木山・彭・大里・孫・(宮)田畑・(非)吉川(良)・李・楊(中)・梁・呉	18	2004年 予定
3	文化のかたち	21世紀の新千年にふさわしい総合的な文化や文明の把握を目指し、新しい「知の地平」を拓く。	今年度は、メンバーの刷新を計り、グループの個人の研究活動を活性化してゆく。具体的には、今年6月初旬にミーティングを開き、各メンバーの研究分野の共通課題ごとに研究班を編成して相互啓発を計る。 夏期休暇中に各研究班の意見を調整して本グループ『叢書』の発行を準備し、今後の活動の企画を練る。	水 野	水野・(学外)中本・岩本・羽佐田・辻子・小馬・鈴木(修)・堤・(非)秋山・大須賀・(非)佐藤(江)・(非)米重・(非)八島	13	2003年 検討中
4	西洋文化の受容—思想と言語—	近代日本における西洋文化受容の総合的研究	本学共同研究奨励金(2001-2002年度)を受け、月例会・研究会・海外調査・国内調査と精力的に活動してきた。今年度はこれまでの成果をもとに論文集の出版を予定している。 4. 班員各人のニューズレター；刊行した自らの輪稿に添えるなどの形で適宜、自由に発行して相互啓発を図る。	高 野	(名)岡野(哲)・鈴木(修)・伊坂・岡島・中島(三)・高野・(非)浅山・(法)吉井・(経)池上	9	2003年 予定
5	物語研究	神話、伝承、前近代の物語、近代小説など。口承・書承の物語的言語表現の諸形態を対象に、ストーリーやプロットなどの(構造的)理論、ならびに歴史性(時間的、感性的要因)について幅広く考究する。	1. 研究会；2～3回程度—その内1回は、学外から報告者を招きたい。 2. ニューズレター；不定期だが、必要に応じて2～3回発行 3. 講演会；1回—学外から講演者を招聘 4. 班員各人のニューズレター；刊行した自らの輪稿に添えるなどの形で適宜、自由に発行して相互啓発を図る。 5. 叢書刊行へ向けての準備；各人の執筆分担と執筆内容、全体の構成など具体化	日 高	鈴木(修)・鈴木(陽)・日高・(非)藤本・小馬・鈴木(彰)	6	2004年 検討中

人文学研究所共同研究グループ一覧

2003年5月30日現在

No.	名称	研究テーマ	活動計画	代表者	メンバー	人数	叢書
6	各国地方史の比較 史的研究 —新編中国地方志叢 書を中心として—	世界史を現存する国家、民族、文 明というレベルで考察するのでは なく、地方史という狭い地域史的 観点から見直すことを目的とする	本学研究所は、中華人民共和国地方志叢書を大量に 所蔵し、又現在も継続購入している。この貴重な蔵 書を本学の中国研究者を中心に、読み、調べ、 分析する。その為の研究会を開催し、また世界各地 域の研究者にも参加して頂き、現在の国家、民族、 文明に取敵しない文化の多様性を再発見する作業を 行う。	小林	小林・大里・孫・岡島、〔経〕柳 沢、〔営〕廣田・佐々木・増 子・谷川	9	未定
7	ポストコロニア ルの冒険	ポストコロニアル・スタディーズ の現状と課題について	過去3年間の研究活動をふまえて、個別研究を進め る。今後の活動についての企画を練る。	永野	小馬・尹(建)・後藤(政)・永 野、〔経〕的場	5	無
8	自然観の研究	自然観の変遷と展望	以下の三分野について、順次、研究会および講演を 行う。 1. 思想における自然観 (2000～2001年) 2. 文学における自然観 (2002～2003年) 3. 環境問題における自然観 (2004年)	佐藤 (夏)	伊坂・岩崎・奥田・鈴木 (修)・中村(浩)・松本 (安)・佐藤(夏)・〔営〕復本	8	2005年 予定
9	東アジア比較文化 研究会	日本、中国、朝鮮等の言語、文学、 歴史、民俗などを比較文化的視点 から研究	1. 年に数回、研究発表会を開催する。 2. 個別課題ごとに研究グループをつくり、各種の研 究助成に応募する。	山口 (健)	望月・佐野・木山・福田・中島 (三)・日高・大里・彭・金・ 孫・浅山〔非〕・小馬・鈴木 (陽)・高野・山口(健)・〔経〕 河野・〔営〕田畑・〔営〕廣田・ 前田(禎)	19	無
10	スポーツの系譜	スポーツの起源、構造、機能に関 する多次元的研究	1. スポーツの起源に関する文献的研究、特に野球やサ ッカー等の起源が明白でないスポーツについて検証 する。又文化との関わりについて明らかにする。 2. スポーツの持つ構造(ルール)に関する研究、各 スポーツの文明的観点から明らかにする。 3. 上記1、2背景として、スポーツが現代社会(及び 過去)において果たす役割について考究する。特 に地域社会との関わりについて調査研究を行う。	三星	三星・鈴木(陽)・矢野・寺 沢・小馬・八久保	6	2006年 度予定
11	色彩語の社会言語 学的研究	1. 色彩カテゴリーの社会的ゆらぎ に関する研究 2. 上記ゆらぎの異文化の対照学	色彩カテゴリー(色名を含む)示す空間上の範囲 について実験・調査的に測定し、それからのゆらぎ について社会意味論的な観点から分析する。また異 文化間の比較的対照を行う。	彭	彭・三星・小馬・堤・尹(亭)・ 松村・新木・加藤・徐・星野	10	未定

〔名〕 名誉教授  
〔非〕 非常勤講師  
〔学外〕 学外研究者